

5月12日は

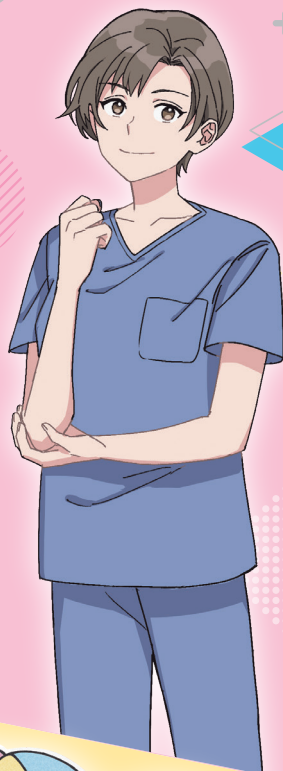


看護の日

2024年度

「忘れられない看護エピソード」

～いのちをまもり、支えるプロフェッショナル～



「看護の日」キャラクター

かんごちゃん



生きるを、ともに、つくる。

公益社団法人 日本看護協会

## はじめに

5月12日は「看護の日」です。  
毎年、この日を中心に、厚生労働省と日本看護協会は  
「看護の心をみんなの心に」をメインテーマとして、  
全国各地でさまざまな事業を行っています。

「看護の日・看護週間」事業で行ってきた  
「忘れられない看護エピソード」募集では  
「いのちをまもり、支えるプロフェッショナル」と題し、  
現場で働く看護職の皆さまから日々実践している  
看護のプロフェッショナルとしての専門性や魅力を、  
次世代を担う若い方々に伝えるエピソードを募集しました。  
ご応募いただきましたたくさんのエピソードの中から、  
受賞した3作品をご紹介します。

看護にまつわるエピソードが、  
若い方々に看護の魅力を伝え、  
将来、看護の道を目指すきっかけとなれば幸いです。

公益社団法人 日本看護協会

最優秀賞に選ばれた作品「12年の時を経た約束」が  
アニメーション化されました！  
作品は、日本看護協会ホームページより視聴いただけます。





## 「最期の願い」

受賞者：大石 有美香さん

「ハナは自分で姉貴に預けに行きたい」

その言葉を患者から聴いたのは、働き始めて3年が経ったある日のことだった。

肺がん終末期と診断されたその方は、緩和治療として医療用麻薬を持続投与するほどの呼吸困難感があった。いつも訪室するとじつとりと冷や汗をかき、苦痛からか看護師に苛立たしさをぶつけることも入院日数を重ねるたび増えていた。そんな時、急に「ハナは俺じゃないとダメだ。俺が姉貴に預けに行きたい」とぼつりと弱々しい声で私に訴えた。

「ハナ」とは、彼と一緒に暮らす1匹の大切な家族、柴犬のハナちゃんだ。

最期にそれだけは絶対に自分でやりたいと彼の意思はとても強かった。その姿に私はなんとかその願いを叶えてあげたい、担当として最期を一緒に全うする責任があると考え、すぐに多職種に協力を仰いだ。また、彼の家族にも協力を依頼し、快く協力を得ることができた。

医療用麻薬は一時的に内服へと変更し、万が一

に備え蘇生セットも準備した。そしてその方は家族の車に乗り、医師および看護師が引率し約1時間程度の外出をした。外出中は軽度の呼吸困難感や冷汗の症状が出現することもあったが、自宅に到着すると車椅子に移乗し、入院中では見ることのできなかった優しい穏やかな笑顔で愛犬のハナちゃんと触れ合っていた。また「これからは姉貴がお前を見てくれる。わかったか?」と優しく声をかけ、ハナちゃんも話が理解できているかのように見つめ返し、穏やかに姉に預けられた。

そして1週間後、亡くなられた。

看護師として働く中で、患者にどのような関わったら良いのか、何がその方にとって良いのか悩むことがたくさんある。しかし、その方に寄り添い続け、一緒に何ができるかを考え続けていくことで見つけられることも必ずある。これからもそれを大切に看護をしていきたい。



## 「今まで見えていなかった看護」

受賞者：長野 樹さん

看護師2年目の冬、私達家族に起こった悲劇。寒い冬の深夜、父が心停止した。母も私も看護師、妹も看護学生、看護師一家で心強いねと言われてきたがこの日だけは看護師であることが辛かった。父がかかった劇症型心筋炎は致死率50%。医師の言葉一つに最悪の事態が起る可能性が高いことが伝わったからだ。父は今まで見てきたどの患者さんよりも重症だった。たくさんのチューブが入り、人工呼吸器や補助循環装置管理下のため鎮静をかけられ意識のない状態であったが、握った手だけはいつもの父の手だった。絶対諦めてはいけないうとそう心に決めた瞬間であった。

急変して半日も経たないうちに大病院への転院を勧められ、たくさんの医療職の方が救急車に同乗して転院することになった。目まぐるしく変わる状況に対応しきれず、口には出さなかったが本当に大丈夫なのか家族はみんな不安だったと思う。転院手続きが終わり、一緒に救急車に同乗してくれた看護師さんが挨拶に来てくれた。「また

元気になったら皆さんで顔を出しに来てくださいな」と。その時の私達にとってその言葉がどれだけの力になったか。家族以外の人が父は元気になると思ってくれている、父は助かるのだと。今でもこの時の状況や気持ちは昨日のこのように思い出す。

それまでの私は看護師としてまだまだ経験が浅く、看護師としての役割や看護の重要性が分かっていなかった。患者さんにとっては医師の言葉が絶対で看護師の言葉は届いていないのではないかなと思う時もあった。けれどそうではなかった。看護師の言葉は、看護の心は患者さん自身に、そして患者家族の心に響くのだと。

心停止から8カ月経ち、父は無事に自宅退院できた。コロナ禍もあり、まだあの時の看護師さんに会えてはいないがいつか家族全員で元気になったよ！ありがとう！と伝えにいきたい。絶望の淵にいたあの時の私達を救ってくれてありがとう。



## 「12年の時を経た約束」

受賞者：坂倉 喜代美さん

以前勤務していた部署のスタッフから、12年前に外来で化学療法を受けていた患者が、その当時担当していた看護師を訪ねてきていると連絡があった。その人は約束していた絵本を持ってきたと言っていると聞き、私はハッとしました。12年前、悪性リンパ腫で化学療法をしていたNさんだとすぐに記憶がよみがえった。

当時私は、がん化学療法看護認定看護師を取得し外来化学療法室で勤務していた。Nさんは突然のがん告知から始まり、抗がん剤の副作用でかなり落ち込まれていた。副作用の対処方法を指導しながら、なんとか元気を出してもらいたいと思っていた。今までの生活や気がかりなどを伺いながら「Nさん、元気になったらやりたいうことはありますか?」と問いかけた。最初は「何も思いつかないです」と返答だったが、次の治療に来られた時、Nさんから「やりたいことありました。亡くなった娘の詩を絵本にすること。ずっと前に思っていた事を思い出しました」それまで

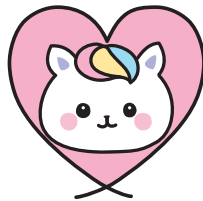
暗い表情だったNさんがとても明るい表情で語られ、私もNさんの希望を応援することを誓った。その後治療を終えたNさんとお会いすることはなかった。

そのNさんが12年の歳月を経て絵本を持って会いに来てくれたのだ。絵本にはNさんからのメッセージが添えられていた。

「当時は状況に押しつぶされそうな失意の底を彷徨いながら訪れた中、丁寧に対応される温かなお人柄に感謝して話すうち、昔奥深くしまい込んだ小さな夢を語る自分に驚きました。でもその会話が光となり励みとなって、今日の生活と命に繋がっているように感じております。あの時、その後の生きる望みとなった会話と素晴らしい出会いに感謝いたしております」

私は今年度で定年を迎える。私はいつも目の前にいる患者に私のできることはないかを考えて仕事してきた。患者の思いに寄り添い希望を支えることはとても大事な看護だと後輩に伝えたい。

5月12日は



看護の日

<https://www.nurse.or.jp/>



看護の日

**【主催】 厚生労働省 / 日本看護協会**

【後援】 文部科学省 / 日本医師会 / 日本歯科医師会 / 日本薬剤師会 / 全国社会福祉協議会 / 日本病院会 / 全日本病院協会 / 日本医療法人協会 / 日本精神科病院協会 / 全国自治体病院協議会 / 日本助産師会 / 日本精神科看護協会 / 日本訪問看護財団 / 全国訪問看護事業協会 / 全国老人保健施設協会 / 全国老人福祉施設協議会 / 日本労働組合総連合会 / ささえあい医療人権センターCOML

【協賛】 テルモ (株) / 東洋羽毛工業 (株) / ナガイレーベン (株) / パラマウントベッドホールディングス (株)